

母の700 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

子どものそばにある短歌⑤／千葉聡 2
いわさゆうこさんにインタビュー 3
「母のひろば」700号記念対談／落合恵子、酒井京子 4
「母のひろば」のあゆみ 7
イラスト／田畑精一



散策 — 図書館にて —

辻村益朗

図書館の書架で、すっかり忘れていた若い頃の装丁本に出会ったりすると、その頃の事がよみがえってくる。フリーのブックデザイナーとして、仕事を始めたのが1965年頃。67年初版の『いないいないばあ』は、子どもの本と一般書籍との境界も定かではない、駆け出し当初の1冊であった。その頃既に、63年には「母のひろば」がスタートしていた。いまこの号で節目の700回をむかえる。振りかえると半世紀以上の歳月が流れ、折々の子どもの本の風景が多くの方々によって書かれてきた。しかしそれは、新刊の話題、子育ての苦労や思い出だけに留まることは決してなかった。

81年の200号では、乾孝さんが「子どもの未来を戦争と貧困とで脅かそうとする政策の圧力は強まる」と指摘された。500号でも、古田足日さんが平和憲法「改憲」について、PR誌の限界を超えた鋭い発言として書かれていたのがいまでも印象に残っている。この発刊当初からの底流が、これからも変わらずに続くことを願っている。

『いないいないばあ』ではじまった「あかちゃんの本」シリーズは、5冊目で画家もかわり、いわさきちひろさんの絵でも刊行が続いた。最初の4冊の瀬川康男さんの絵で、本文のページ展開にいろいろ苦労した経験が幸いしてか、シリーズ全9冊に関わった。

その同じ頃の新シリーズに「若い人の絵本」がある。1冊目は66年刊で、次の67年から装本を担当する事になった。これは青春への出発点に立つ若い世代に向けた新しい試みで、毎年刊行が続きロングセラーとなっている。被爆者たちの詩文集『わたしがちいさかったときに』や、ロシア貴族を廻る熱烈な愛の詩『愛かぎりなく』、賢治、一葉などの名作も含んだ多彩な内容である。賢治の作品ほど知られていないが、小川未明の反戦童話『野ばら』は、戦前の童話に特有の文体だが、挿絵には65年刊で絶版となった『小川未明集』（新潮社）での茂田井武の挿絵（多色刷り）を起用している。ただこのシリーズでは、本文の印刷が1色刷りであり、旧本との形状の違いで、挿絵にレイアウト変更の制約も生じた。しかし、絵が醸し出す雰囲気は、どこか物語とよく似合って変わることはなかった。

ふと、『野ばら』——『野薔薇』が第一次世界大戦（1914-1918年）後の不穏な情勢の中で書かれた事を思った。平和に見える今の日本では、今日も戦争の映像が人ごとのように映しだされている。まさに人類の歴史は、繰り返される戦争の歴史である。もうこれ以上、武器商人を太らせてはならないと痛切に思う。（つじむら ますろう／ブックデザイナー）

子どものそばに
ある短歌

5

名探偵とともに 千葉聡

恋と愛の違いは終わりのあるなしと子に答えたり眠りのきわに

富田睦子『風と雲雀』

夜、ベッドに入ったとき、ふいに子どもが、お母さんに聞きます。

「恋と愛は、どう違うの？」

お母さんは少し考えてから答えます。

「恋には終わりがあるけれど、愛には終わりが無いんだよ」

この子は、「そんなのか」とつなずいて眠りについたことでしょう。親が自分に寄せてくれる思いは「愛」だから、これからずっと続いていくんだ、と安心しながら。

子どもは、世界中すべての謎を解き明かそうとする名探偵。ときに大人を悩ませるような質問をしたり、大人の固定概念を揺さぶったり。

名探偵たちの疑問に、どのように向き合えばいいのか。大人は悩めますよね。そういうときには、ぜひ「母のひろば」を開いてみてください。ここには、子どもたちの思いを受けとめるヒントが載っています。

七〇〇号の伝統のある「母のひろば」の仲間に入れていただき、とてもうれしいです。これからも名探偵たちの助手として、頑張ります。

ちば さとし 1968年生まれ。歌人・高校教諭。著書に『短歌は最強アイテム』（岩波ジュニア新書）、『グラウンドを駆けるモーツァルト』（角川書店）などがある。

絵はリアルでありながらも、そのやさいの持つ存在感、やさいが発している生命力のようなものが、子どもたちに伝わればいいな、と思いつながら描いています。そのために、畑の

祝「どんと やさい」シリーズ**10**周年! &
10作目『ごろんずっしり さつまいも』刊行

いわさゆうこさんにインタビュー

畑で元気に育つやさいたちが主人公の「どーんと やさい」シリーズ。

葉っぱや土のにおいまで伝わってくるような絵とリズムカルな言葉で、

1冊1冊、主人公のやさいのことが描きつくされています。

そんな絵本がどんなふうにもまれるのか、作者のいわさゆうこさんにお話を伺いました。



ごろんずっしり さつまいも
定価1320円（本体1200円+税10%）

「どーんと やさい」シリーズ

- きゃっきゃ キャベツ
- つやつつや なす
- どっかん だいこん
- ごんごろ じゃがいも
- まっかっか トマト
- どででん かぼちゃ
- にににん にんじん
- ごろりん たまねぎ
- ぷっくり えんどうま

定価1210円（本体1100円+税10%）

中で育つ収穫前のやさいに触れ、植物として生きているやさいの姿を見ることを大切にしています。

新刊は子どもたちに人気のさつまいもが主人公ですね。

折にふれ畑のさつまいもに会いにいき、時にはまわりの土をほつてみて、さつまいものようすを観察しました。ふつうは見るのがない、土の中でさつまいもが育っていくようすを楽しんでください。他の種類のいもも登場しますよ。

最後に、読者のみなさんへメッセージをお願いします。

子どもたちには、スーパーや台所で見えるやさいの、そこへ来る前の姿を感じてもらいたいです。植物は、自分で自分のエネルギーを作ります。いわゆる光合成というシステムです。人間はそんな器用なことではできません。そのため、いろいろなもの（やさいや穀物、肉など）を食べて力に変えています。種や苗からりっぱに育つ植物としてのやさいの姿を知ったら、「いただきます」という言葉にも実感がわくのではないでしょう。

この「どーんと やさい」シリーズから、少しでもそんなことを感じてもらえたら嬉しいです。

運動体としての 「母のひろば」

酒井 「母のひろば」は、一九六三年に創刊され、六十年近く発行し続けてきた草創社の大切な小冊子です。創刊当初は、まさに読者との交流の場であったと聞いています。「私たちも参加したい」という読者の声が寄せられ、それを受けて勉強会や交流会を行い、そのことが次の号に掲載されたりと、読者と非常に密接な関わり合いの中で歩んできました。

落合 一九六三年といえば、私は十八歳でした。「母のひろば」はきっと、新しい、文芸的かつ平和的な運動としてスタートしたでしょうね。そのころの学校の授業といえば、先生が熱くて、しきりに「これからは民主主義の時代だよ」と言っていました。創刊当初の読者は、その時代のお母さんたちですから、きっと彼女たちの熱い思いが「母のひろば」を後押ししていたのでしょう。

酒井 戦後の熱気がまだあった時代ならではですね。子どもをよく育てたいと純粋に思っていた母親たちが集まっていた場所なのです。

七〇〇号に至るまでのあいだ、「母のひろば」の運動体としての側面も変わってきました。ただ、変わらないことは、

700号記念対談

「母のひろば」は、読者の皆さまと、子どもの本にかかわる文学者、画家、研究者が、編集者を仲立ちとして交流する広場として、1963年に創刊され、多くの読者に支えられ、700号を迎えることができました。「母のひろば」同様、本の出版とは別のかたちで、子どもの本の読者と交流をしながら理念を発信してきた落合恵子さんをお招きして、弊社会長の酒井京子とお話をさせていただきました。



今の時代がどういう時代なのかを問い続け、「母のひろば」に何ができるのかを考え続けてきたことです。

落合 そうした時代の熱さを過去形で語らなければいけないのは無念ですが、今は「運動」と文化的な活動が別のものになってきているように感じますね。でもやはり、政治と生活は切り離せません。

酒井 古田足日さんが、六〇〇号記念号の巻頭言で指摘していますが、「教育基本法」が変えられてしまったことが、非常に大きいように感じますね。

落合 教育基本法を変えた張本人が亡くなり、国葬が行われようとしています。あつという間に社会は変わってしまうと実感しています。

古代ローマ時代から市民には「パンとサーカス」を与えておけばいいという考え方があったわけですが、まさに今の時代はそうなってしまうている。だからこそ敷かれたレールに自分は乗らないと決めることが、健康的に生きる道なのだと信じています。「母のひろば」からも、同じような信念を感じますね。

酒井 出版社と社会運動が直接的に関わりを持たなくなってきた今のような時代でも、運動の大切さを感じた出来事があります。二〇〇一年に「紙芝居文化の会」を創立したときです。そのときに感じた

のは、自己実現を願い、平和を願う女性があんなにもたくさんいたのかということです。平和を切実に願っている良心的な人たちは、まだまだいます。そういう人たちから力をもらって、「母のひろば」も継続させていってほしいと思います。

落合 素敵な話ですね。デモに行っ拳を上げるだけが「運動」ではありませんね。昨日の続きの今日があって、子どもたちがお腹いっぱい食べられる、そうした当たり前のことを願うだけでもいいのです。特に重要だと思っているのが「女性性」です。現実には母になったかなっていないかということではなくて、女性の視点を大切にしていくことです。

それぞれの時代の中で、女性たちは、怒りを捨ててきた、置いてきてしまったという過去があります。いまもう一度この時代を見返すとどうか。捨ててきてしまった小石を拾い直して、自分の目の前に置いたときに見えるものはなにか。平和であり、子どもの幸せのはずなのです。

「母」から 「母なるもの」へ

酒井 七〇〇号に至るまでのあいだに変わってきたことの一つに「母のひろば」の名称の意味合いもあると思います。創

刊当時は「子育てをするお母さん」という意味でしたが、今は女性以外も持つている「母なるもの」と考えています。

落合 狭義の意味で「母」と捉えてしまうと、大事なことが見えなくなる可能性もありますよね。子育ては女性のものでないし、男性のものでもあります。すべての垣根をとってしまっただけで「母」という言葉考えたとき、「何かを育むもの」「何かを愛するもの」「何かを深めるもの」その一つの象徴としての「母」もあっていいだろうと私は考えます。

もちろん問いかけ自体は大事だし、否定はしません。ただ、全部一個ずつ説明しなければいけない社会も不幸だと思うのです。そして時代を経て流れてきたものの底流を否定するのも寂しい。底の流れにははじまりの理念があるのですから。ただ一方で、固執してそこに居座ってしまつと、バックラッシュが起きてしまうことにも注意しなければいけません。その部分はつねに学び続けていかなければならないですね。

**作家・画家とともに
歩んできた「母のひろば」**

酒井 「母のひろば」は、月刊で発行しています。ですから、その時代の流れと

「母のひろば」

落合恵子 × 酒井京子

(作家、クレヨンハウス主宰)

(童心社会長)



イラスト／田畑精一

密接に企画が立てられ作られてきています。読み返してみるとなるほど、社会とのつながりを大事にしてきたと思うわけです。

落合 アフリカ系アメリカ人の作家アリス・ウォーカーさんが「私の作品は私の生活の副産物」と言っています。生活から作品が生まれ、作品から文化が生まれるのです。例えば戦争があったときに、拳を上げて叫ばなくても、ペンによって反戦や平和を訴えられるのが作家の強みだと思います。画家も同じですね。社会の空気の中で生きている肌感覚が欠かせないものではないでしょうか。それが、文学の豊かさにつながるのかなと思うわけです。

酒井 たくさんの作家や画家たちと仕事

をしてきましたが、その方たちの生活が、作品を生み出すのだと実感しています。どういつ風にも今の世の中を見て、考えているか、どんな生活をしているか。そしてそれが深ければ深いほどいい作品になっていく。「母のひろば」は作家や画家にたくさん寄稿してもらっていますが、そういう視点で見ても、面白いのではないかと思います。

落合 何のための絵本なのか、紙芝居なのか、という問いにも重なりますね。それにしても年表を見返すだけでも、錚々たる人たちが「母のひろば」に寄稿しています。

酒井 童心社が、平和や子どもの幸せというところから出発して、子どもに向けた優れた絵本や紙芝居を出版していることとされている姿勢に、著者たちが希望を持ってくれているようにも感じていました。著者の皆さんに協力してもらい、なんとかここまでやっていくことができたのだと思います。

落合 例えば、一九七二年の創刊一〇〇号に早乙女勝元さんが寄稿されていて、最新の六九九号に早乙女さんの追悼記事が載っている。まさにこれは一つの平和についてのメッセージですね。それから、

二〇〇号に宮川ひろさんが言葉を寄せていれば、六〇〇号には宮川健郎さんが寄稿されている。親子二代ですからね。「母のひろば」が、作家とともに歩んできたということがよくわかる一つの例じゃないでしょうか。

酒井 普段の会話や、ときに仕事と離れて一緒に遊んだりする中で、その著者のことを理解していき、「母のひろば」への寄稿、作品制作につながっていったように思っています。

落合 作家自身もまだ気づいていない、これを書きたいという疼きを見つづけるのが、編集者の仕事の一つですよね。そのためには、本当に親しくならないうけない。まだ芽が出ていないものに、水をあげて、双葉が開いた瞬間にはすごい喜びがあるのでしょう。

酒井 仕事に結実させるには、編集者は長いスパンで考えなければいけないと思います。一方で、著者のことを理解していくのと同じように、著者も編集者のことを見えています。その意味で、童心社が今どきいうことを考えているのかを、常に提示していく必要もあると考えます。

「母のひろば」は、読者に向けてだけでなく、著者に対してもそのメッセージを発信していることになっています。「母のひろば」が毎月届くことで、みんなが安心

してくれたいなと思うのです。

落合 何十年も商売をしているうちに、いつの間にか違う方向に行ってしまう出版社もあります。心ある書き手にとっては、変わらない姿勢であることは、心強いことだと思います。変わってはいけない、ここは変わらないということを一点持っていれば、信用するに足りますからね。

クレヨンハウスは今年で開業から四十六年が経ちますが、子どもとしてお店に来ていたお客さんが、母親父親になって戻ってきてくれます。いまは、おばあさんおじいさんにまでなっています。お店をやっていると、人の成長と人生のいろんな季節に関われる喜びがありますね。

酒井 売れるものしか置かないお店が増えている中で、クレヨンハウスのようにいろんな作品が置かれているお店があることは、私たちにとって大変強いことです。そんなクレヨンハウスが東京の真ん中の表参道にあることは、とても大きな救いになっています。

落合 ありがとうございます。でも実はこれから東京の郊外で、今までの仕事プラス農業と福祉を一体化した理念のもとで活動するスペースを計画しているのですよ。

こうしてお店をやっていると、いろんな読者たちにも出会えます。ある絵本が

好きで、ずっとその本から手を離さない子がいかに多いことが。そういう風に、好きで好きでたまらないものを一つ持っていることは、人生における強みとなると思っています。それを持っているかないかで、人生の景色が、心のしなやかさが、格段に変わってくると思うのです。

今の時代は、物事を満遍なく見たり、すぐに答えを出すことを求められたりする社会になりつつあります。何か好きなものと出会うための長く深い旅が許されない社会というのは、如何に貧しいことか。置いていかれる子、食べられない子、泣けない子が増えているそうです。

そんな時代だからこそ、「母のひろば」の役割は重要です。だって「母のひろば」は単に読んで終わりではないのですから。読んだら、そこに書かれたことを持って外に出ていける。身近なところでもいいから、家族や友人にその話を伝えて、ぜひ議論していったほうがいいですね。そんな広がりをもてる小冊子だと思っています。

これからの「母のひろば」

酒井 童心社は出版理念を掲げていますが、それを社員だけのものにせず、「母のひろば」や出版物を通して発信して、読者に受け取ってもらって、さらに広げて

いつてもらいたいという思いがあります。**落合** 自分に対して懐疑的になってしまったり、疲れてしまったときの心の居場所として、いつだって帰ってこられて、「おかえりなさい」と言ってくれる、広い心をもった媒体としてあり続けてくれるよう期待しています。

知らないうちに、ドアは閉まる方向に圧力がかかってしまいます。開いている窓だって、気がついたら閉まっていることもあるのです。

人の痛みを理解し、子どもに目を向け、女性たちをとりまく問題について考え、人権感覚をもって、扉を開き、窓を開ける方向での様々な提案、メッセージを発していただけたらと思います。

私の友人に、「母のひろば」が大好きで、今でも毎月読んでいるという八十年代の女性がいます。彼女は自分自身を確かめるために読んでいると言います。今がどきどき時代なのか、自分の考え方が間違っていないか、「母のひろば」が一つのリトマス試験紙になっていると。

酒井 責任重大ですね。これからの「母のひろば」には、時代の間違った流れに抗って、自由に発言していったほうがいいですね。ちゃんと受け止めてくれる人たちがいて、その存在を信じられる場所なのですから。

「母のひろば」のあゆみ

1957年 童心社創立

1963年7月

「母のひろば」創刊

1号から10号までは32ページの小冊子で、隔月発行（定価50円）
表紙イラスト：いわさきちひろ



1965年3月

「母のひろば」11号発行

11号よりパンフレット（現在の形式）に変更
B5サイズ、12ページ、隔月より月刊に
定価15円（年150円）
12号より300号まで題字：浜田廣介
14号より以降現在まで8ページに



1969年4月 社屋が新宿区三栄町に移転

1972年9月

「母のひろば」創刊100号

巻頭言：与田準一「夏の日々のノート」
イラスト：いわさきちひろ
特集：「現代母親気質」／青木きみ、北畠八穂、乾孝、櫛田ふき、早乙女勝元、新川和江、周郷博、須藤克三、鳥越常子、中村博、早船ちよ、羽仁説子、松谷みよ子、松田解子、丸岡秀子、棕鳩十



1981年1月

「母のひろば」創刊200号

巻頭言：乾孝「二百号を祝う」
イラスト：中尾彰
特集：私と「母のひろば」／井口文秀、池上摩里子、遠藤てるよ、川北亮司、清水えみ子、関英雄、古田文恵、宮川ひろ



1989年5月

「母のひろば」創刊300号

巻頭言：与田準一「このうえないよろこび」
イラスト：こさかしげる
特集：「母のひろば」に思うこと／安部富士男、今関信子、大塚達男、飛島詩子、福田トシ、わたりむつこ



1991年9月

「母のひろば」328号発行

328号より定価30円（年360円）に

1997年9月

「母のひろば」創刊400号

巻頭言：寿岳章子「最後の抱擁」
イラスト：和歌山静子
特集：「現代母親事情」／汐見稔幸、下田純子、林和恵



2001年4月

「母のひろば」443号発行

443号よりB5からA4サイズにリニューアル、定価50円（年600円）に



2006年1月

「母のひろば」創刊500号

巻頭言：古田足日「平和を素手で守り得る人間へ」
イラスト：田島征彦
特集：「母のひろば」のこれからに期待すること／阿部明子、いわむらかずお、瀬名恵子、寺内定夫、得田之久、富安陽子、とよたかずひこ、なかやみわ、広瀬恒子、松野正子、水谷章三、宮川ひろ



2006年7月 社屋が文京区千石に移転

2010年3月

「母のひろば」550号発行

550号よりカラー印刷に

2014年5月

「母のひろば」創刊600号

巻頭言：古田足日「児童文学、三つの名言」
イラスト：田畑精一
特集：「母のひろば」600号によせて／佐々木宏子、長野ヒデ子、宮川健郎



2017年3月

「母のひろば」634号発行
童心社創業60周年記念号

巻頭言：酒井京子「創業60周年を迎えて」
イラスト：いわさきちひろ
特集：「童心社創業60年を迎えて」／アーサー・ピナード、いわむらかずお、内田麟太郎、佐々木宏子、谷口広樹、田畑精一、得田之久、とよたかずひこ、長野ヒデ子、なかやみわ、細谷亮太、まつのりこ、三浦太郎、宮川ひろ、和歌山静子



2022年9月

「母のひろば」創刊700号

9月の新刊図書！

童心社のおはなしえほん

ひみつのえんそく

かわしまえつこ／作

武田美穂／絵

定価1430円（本体1300円＋税10%）



えんそくの日、そうたは熱をだして家で寝ています。するとリュックを背負ったたぬきがむかえにきてくれて……。冒険いっぱいのお話絵本！

童心社のおはなしえほん

まいごのモリーと こうもりのかさ

こまつぶひさ／作

はたこうしろう／絵

定価1430円（本体1300円＋税10%）



ひつじのモリーはおでかけするのがだいすき。今日はおとうさんをバスターまでおむかえです。でもちっともバスターにつかなくて……。

読者の声

とことこえほん
ほっぺにちゅ！

新井洋行／作・絵

定価990円（本体900円＋税10%）



これから生まれてくる赤ちゃんのために買いました。お腹にいるときから絵本の読み聞かせをした
いと思い、たくさん読んでいます。新井洋行さん
の絵本はどれもとても可愛らしく、読んでいるこ
ちらもほっこりします。この絵本で、親子のコミ
ュニケーションをたくさん取りたいと思っています。
（福岡県 Y・T 二七歳）

松谷みよ子 あかちゃんの本
のせてのせて

松谷みよ子／作 東光寺啓／絵

定価770円（本体700円＋税10%）



娘が生まれて間もなく保育園に預けて働きました
が、思いがけず素晴らしい環境に恵まれました。
絵本もそのひとつです。娘が大好きだったこの絵
本を孫に贈る喜びと、永く残していただきたいと
いう気持ちをお伝えしたいと思います。これから
また孫の成長と共に、お世話になります。
（北海道 K・Y 六一歳）



イラスト／田畑精一

単行本図書
ちいさな宇宙の扉のまえで
続・糸子の体重計

いとうみく／作

佐藤真紀子／絵

定価1650円（本体1500円＋税10%）



細川糸子様
卒業おめでとう。十年たって、また会えると思
わなかったから、とても嬉しかったです。変わら
ない糸子ちゃんではなかったけど、きつとちょっ
とずつ大人になってると思いました。中学生にな
っても元気でおいしく食べられる糸子ちゃんでい
てくださーい！！
（北海道 S・M 六一歳）

あとがき

●700号——気の遠くなる数字です。
先人が築いてきてくれたものですが、
改めて「母のひろば」を出す意義を
考えなければと思います。童心社の
読者の方とコミュニケーションを深め、
子どもたちが育つ環境をみつめ、考
え、そして著者の方と意識を共有して
子どもが真に求めている本をつくりだ
してい……「母のひろば」がそんな
ことに繋がれたらと考えます。◎

●『母のひろば』は、売るために
作られた雑誌ではなく、私たちのも
の。本誌創刊号にある言葉です。「私
たち」には作家も読者も編集者も含
まれ、創刊当初の記事では、それぞ
れの距離がとても近いのです。ぜひ今
の読者の皆様にも様々な形で「母の
ひろば」に参加していただきたいで
す。ご意見・ご感想などございましたら、どうぞお寄せください。①

2022年9月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第700号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：坂本梓 ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込み
いただけます。見本誌（無料）と振込用
紙をお送りいたします。

見本誌に同封
されている振
込用紙で購読
料をお支払い
いただけます
と、手続き完了
となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。

